

研究者：安田 昌代（所属：東京医科歯科大学歯学部附属病院口腔ケア外来）

研究題目：知的障害者の口腔衛生向上に関わる要因の検討

目 的：

知的障害者は障害の特性から口腔衛生に対する介助を要する例が多くみられる。しかし、生活拠点は自宅、グループホーム、施設入所など多様であり、特に自宅で生活している利用者は保護者が高齢化している現状もあり、介助が困難な例は少なくない。満 18 歳以上の知的障害者は通所施設を利用していることが多いにもかかわらず、利用者本人の歯磨き行動が自立している場合、介助磨きが行われていない例もみられる。知的障害者通所施設職員から、利用者の口腔衛生介助に関する指導の要請があった経験から、利用者の口腔衛生に関心はあるが、実施できない現状があることも考えられる。先行研究では、入所施設を対象とした報告はあるが通所施設職員対象の報告はほとんどない。

本研究においては、知的障害者通所施設における利用者に対する口腔衛生に関わる現状と職員のニーズについて明らかにし、知的障害者の口腔衛生向上に関わる要因を検討する。

対象および方法：

横浜市及び川崎市内にある知的障害者通所施設で調査依頼をして了承が得られた 6 施設において、利用者の生活介護に関わっている職員を対象に郵送調査法で自記式質問紙調査を実施した。調査項目は調査対象者の個人要因として、性別、職種、経験年数、担当する利用者の障害程度区分、対象者自身が歯科保健指導を受けた経験とした。利用者の口腔衛生状態に関わる項目として、利用者の口腔内の状態で気になる症状、職員による介助磨きの有無、介助磨きを行う際の状況（姿勢、使用用具、介助磨き 1 回につき職員が介助する利用者の人数、介助磨きにかかる時間、保護者への介助磨きの促しの有無、介助磨き指導を受けた経験の有無）、歯科医療従事者の介入に関するニーズとした。

結果および考察：

1. 対象者の属性

返送された質問票のうち、有効回答が得られた 51 名分を分析対象とした。対象者は男性が 21 名（41.2%）、女性が 30 名（58.8%）であった。平均経験年数は 7.3 ± 7.3 年（最大値 33 年，最小値 5 か月）であった。1 日に担当する利用者数の平均は 19.1 ± 15.4 名（最大値 58 名，最小値 3 名），担当する利用者の障害程度区分は複数回答可で，区分 1 は 11 名（21.6%），区分 2 は 18 名（35.3%），区分 3 は 20 名（39.2%），区分 4 は 23 名（39.2%），区分 5 は 32 名（62.7%），区分 6 は 32 名（62.7%）であった。対象者自身が歯科保健指導を受けた経験は「あり」が 21 名（41.2%）であった。

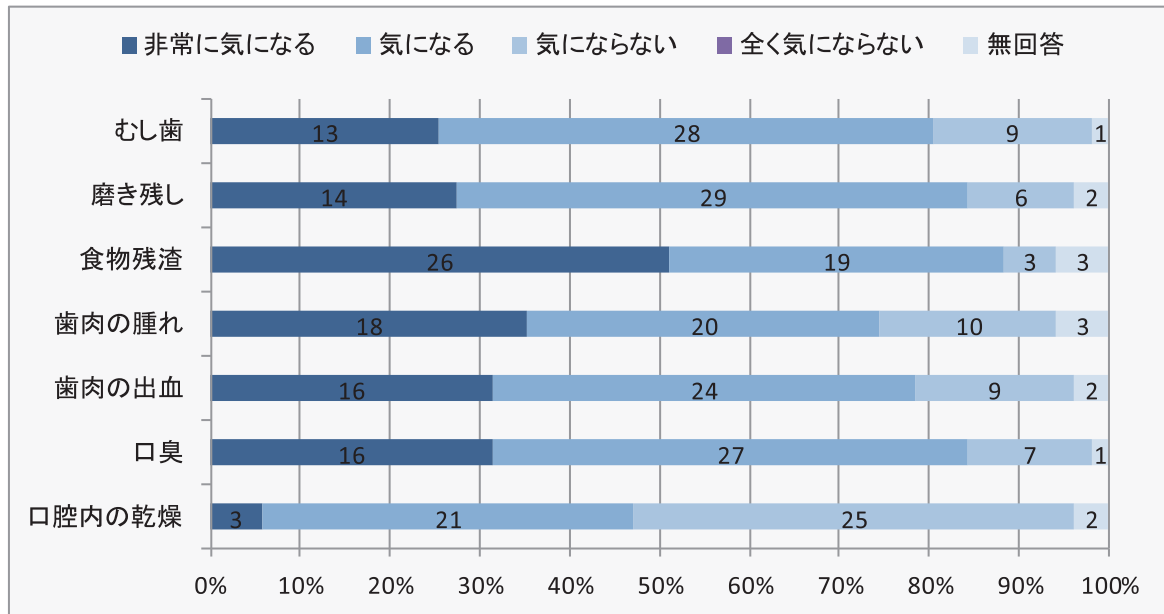


表1 利用者の口腔内で気になる状態

2. 利用者の口腔衛生状態に関わる項目について（表1）

利用者の口腔内で気になる状態について、「むし歯」「歯肉の腫れ」「歯肉の出血」「口臭」「食物残渣」「磨き残し」「口腔内の乾燥」を項目として、「非常に気になる」と多く回答された項目は「食物残渣」で26名（51%）、「気にならない」と多く回答された項目は「口腔内の乾燥」で25名（49%）であった。

自由記載で回答された内容では、「義歯の手入れ」「自宅では磨かないことが少なくない」「歯ブラシが傷んだまま交換されないこともある」「通院を促しても行かない家庭もある」「舌磨きができない」「口内炎や舌の状態」「咬耗」「歯科通院の難しさ」「うがいができない」が挙げられた。

3. 介助磨きを行う際の状況について

職員による介助磨きは、「全員に行う」が18名（35.3%）、「必要な人にのみ行う」が31名（60.8%）であった。介助磨き時の利用者の姿勢（複数回答可）は「立位」34名、「座位」35名、「寝た状態」9名で、介助者の位置は「対面」44名、「後方」15名であった。利用者の保護者や介助者への介助磨きの促しは23名（48.9%）が「あり」と回答している。介助磨きの指導を受けたことのある経験の有無では、「あり」「なし」共に50%であった。

また、介助磨きを利用者全員に行っている人と必要な人にのみ行う人との2群に分け、表1で示した利用者の口腔内で気になる状態で「気になる（「非常に気になる」を含む）」、「気にならない（「全く気にならない」を含む）」に分け、カイ2乗検定を行った（表2）。結果、「口腔内の乾燥」について全員に介助磨きを行っている群の方に「気になる」と回答する割合が多い傾向が見られた。（ $P = 0.238$ ）他の項目は両群に差はみられなかった。

4. 利用者の口腔衛生に対する歯科医療従事者の介入のニーズ

利用者の口腔衛生に対する歯科医療従事者の介入について、「訪問定期検診」「歯科医療従事者

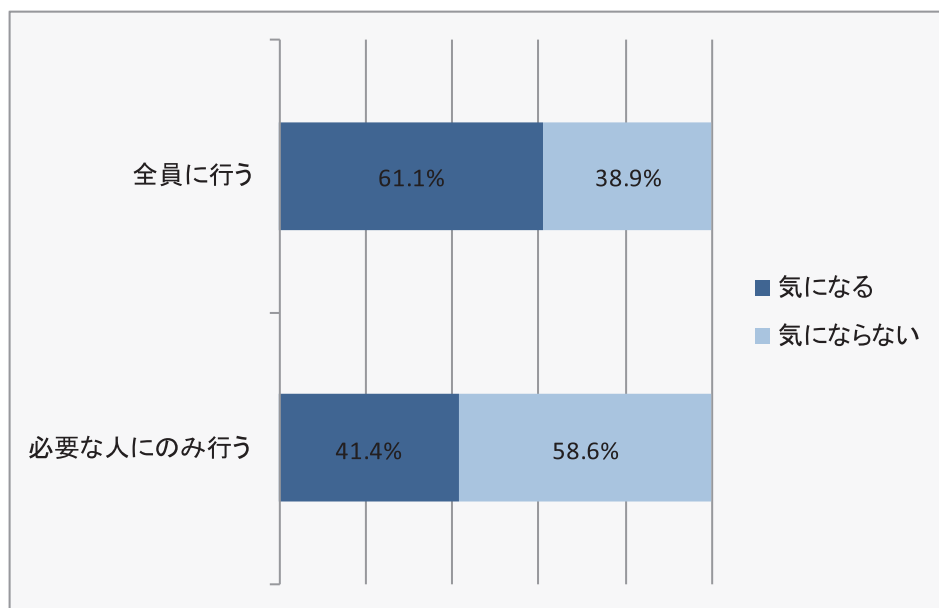


表2 介助磨きを行う対象と利用者の口腔内状態（口腔内の乾燥）への認識との関連

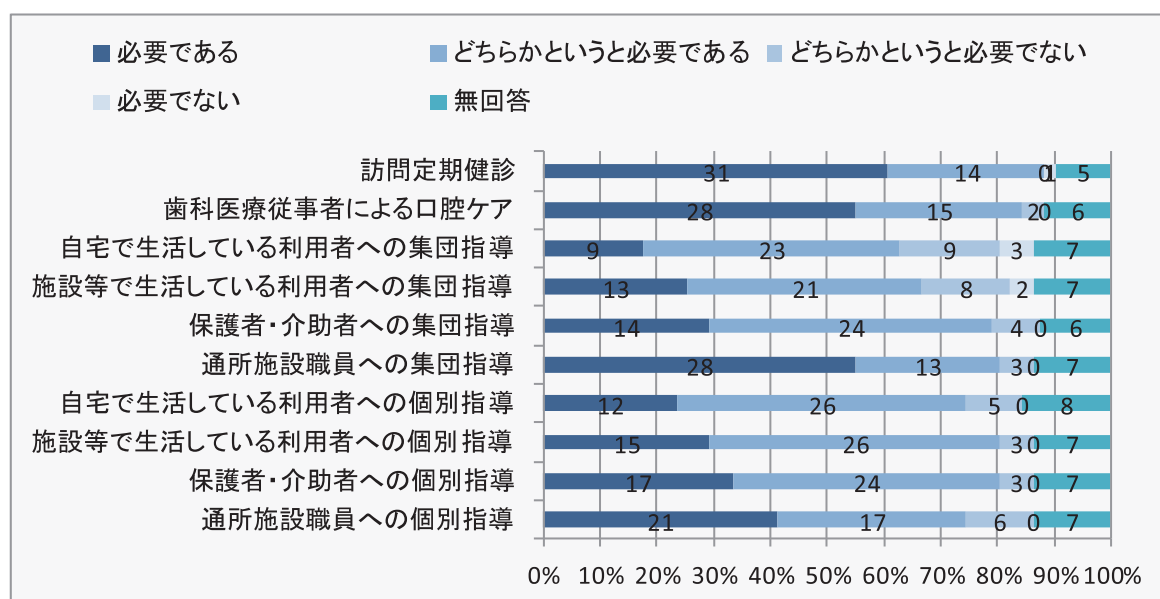


表3 利用者の口腔衛生に対する歯科医療従事者の介入のニーズ

による口腔ケア」「集団指導」「個別指導」に分け、「必要である」「どちらかという必要である」「どちらかという必要でない」「必要でない」から選択してもらった。結果は表3に示す。

自由記載では、「咀嚼・嚥下など食べ方に関する指導」が挙げられた。

5. 考察

知的障害者通所施設職員による利用者への介助磨きは、必要な人へのみ行っている職員が多いことが明らかになった。利用者の口腔内で気になる状態の質問では「食物残渣」「磨き残し」「口臭」が「気になる」と多く回答された。利用者の口腔内状態の関連項目と介助磨きを行う対象との関連は、「口腔内の乾燥」について、介助磨きを「全員に行う」職員のほうが「気になる」と

回答する割合が多い傾向が見られ、他の項目については両群に差はみられなかった。このことから、口腔内の乾燥は認識されづらく、介助磨きをする機会の多い職員は認識しやすいことが考えられる。

また、利用者の口腔衛生に対する歯科医療従事者介入のニーズでは「訪問定期健診」「歯科医療従事者による口腔ケア」が必要であると多く回答されているが、指導に関しては職員への集団指導もニーズとして高い割合を占めていることが明らかとなった。介助磨きの指導を受けたことがない職員もいることから、検診や口腔ケアの実施のみではなく、職員への健康教育や介助磨きの方法の指導が必要であることが示唆された。

成果発表：（予定を含めて口頭発表，学術雑誌など）

第9回日本歯科衛生学会学術大会，第31回日本障害者歯科学会学術大会にて発表予定